・事前の実習訪問宅への承諾と説明。

＜各種職員による同行訪問の実施＞

・同行訪問は全スタッフが行い、各学生の評価も様々な意見が聞ける。

・他の専門職の関わり方など、具体的な事例をとおして、経験するように、協力してくれている。

・色々なケースを、見学してもらいたいので、実習日にケースカンファレンスや、他専門職との連携のある際に、担当スタッフに同行してもらっている。

・指導者との同行訪問よりも、スタッフが同行してくれることが多く、その点で学生を育てるという意識のもとで、実習が続いても気持ちよく受け入れてくれている。

・嫌な態度もとらず同行してくれている。土地観がない学生を次の訪問に行く前にわかる所まで送り届けてくれる。

・学生に対する理解があり、同行訪問した看護師が指導をしてくれる為、良いと考える。何か問題があっても、すぐに声に出してくれる為、大丈夫である。

・一回に2名の実習生を受け入れているが、同行訪問はスタッフが担当することも多い。その際の状況がどうだったか、対応の仕方や態度等についても、意見を聞く事ができるため、良かったと思う。

・訪問に連れて回ってくれ、その時の情報をくれ、共有できる。

・訪問へ連れて行ってくれる。報告書の記載を手伝ってくれる。

・当初、実習の受け入れは拒否があったが、どうにか説得し、受け入れて、同行訪問のみ承諾してくれた。

・元気な高齢者への内容も簡単な訪問は他職種のスタッフが同行してくれ、関係づくりの見学をさせてくれたこと。看護学生が学ぶという姿勢をみせてくれたことで、好感が持てたこと。

＜実習における安全の確保＞

・安全に実習を行う事ができている。不平不満がない。

＜各職員による学生のフォローアップ＞

・担当者が実習後のレポートにコメントを記入してくるので、フォローができると思う。

・実習生の同行訪問にあわせ、事前・事後のフォローも実施できるようなっている。(指導力の向上)チームで協力する雰囲気もできた。

・実際の訪問時の状態や利用者の様子なども報告してくれる。

・看護職の視点以外からも学生にアドバイスできるので、学生にとっても良い学びになると考える。

・学生が不安に思う事や疑問に思う事をその場で教えてくれる。

・業務を兼任しなければならない時は、なるべく負担が大きくならないようにしている。(部屋持ちの数を減らすなど)・学生担当の患者をしっかり把握してくれるので、ケアやナースコールではすぐに学生に伝えてくれる。

・学生が少人数のときは、振り返りを他のスタッフも含め、全員で行っている。

＜学生への声かけ・労り＞

・指導者が不足であっても、指導をしてくれている。学生に声かけをしてくれる。困りごと等、聴いてくれる。

・急な依頼も受け入れてもらえ、実習生の希望に応える事ができた事。フロアでカードを作って、最終日に渡した事。実習生がとても喜んでいた。

＜チームワークの必要性を学生に伝えられる＞

・スタッフが協力し合うことで支援には、チームワークが必要なことを伝えられる。

＜職員間の情報共有＞

・情報共有されている。

＜法人内部の協力体制＞

・法人内部の協力体制もとれている事

＜関係機関との連携＞

・当センターは単独施設となっている為、関係機関にも、ご協力いただいて、実習環境を整えている。看護学生は実習を通じて、関係機関との連携がさらに深まっている部分もあり、また、当センター内のスタッフの質の向上や自己研鑽にも役立っていると思われ、感謝している。

事業所にとってのメリット

＜職員の学生に対する姿勢がわかる＞

・忙しい業務を調整し、学生に関わっている姿勢がわかる。また教員からの評価も高いため。

＜職員の業務の振り返り＞

・職員の日常業務のふり返り、意識改善・向上につながった。

・自分たちの看護のふり返りになる。

・指導を通して、看護について考える機会になる。

・学生さんへの指導や、話す内容から、そう思って仕事しているんだと、こちらもわかる。言語化するいい機会になっていた。

・スタッフ自身の振り返り、学びの場にもなっている

＜職員自らの学習の機会＞

・指導する為には、より専門的に学ぶようになった。

・教えるので、自ら学んでくれたこと。

・スタッフ自身のスキルアップになるため。

・スタッフも指導するにあたり、又、学生の質問に対し、再度、気づかされたり、学んだりできている。

・スタッフから「学生さんに教えようと思うと自分も勉強する」「マンネリ化したケアの見直しになった」などの意見があった。学生さんに説明してくれた内容を聞いて、スタッフの成長を感じた。

・こちらからスタッフへ働きかける事によって、関わる姿勢が以前より更に改善されている。

・クール毎に、指導者を変えて、向上心を持って、次回に生かしている。

表 49　施設内・事業所内でのスタッフの実習への協力について困ったことの自由記述のまとめ

事業所・利用者に関する記述
＜通常業務との兼務による負担＞
・前述したが、実習依頼は区役所が窓口になっている。区役所は職員数が豊富ですが、現場の地域包括支援センター職員は、様々な業務を兼務している。それに加え、実習に必要とされる時間を作れない、暇がない、負担増で責任重い。
＜通常業務の多忙さ＞
・介護施設では常に人手不足の状況なので、職員が忙しそうにしていて、学生が声をかけにくかったり、普段なら(人員が充足されれば)学生のカンファレンスに参加できるのに、それが難しい状況だったりすること。
＜多忙なときの負担＞
・忙しいときは手がまわらずストレスになってしまう。
＜実習指導ができる職員の不足＞
・担当教員との打ち合わせから指導まで、1人でやっているので、実習当日に不測の事態で私が休まなければならなくなった時が大変。もう1人看護師が在籍しているが、入社1年目の職員のため、自分の仕事で手一杯で実習指導まで余裕がない。
・学生実習のスキルがない。パートも多い。
＜同行訪問が難しい利用者の存在＞
・訪問対象者の生活背景が複雑でスタッフの介入さえ好まない人が多い中で、学生同行というと拒否され、関係がこわれそうなことが多いので、スタッフも敏感になってしまう。
＜同行訪問におけるスタッフ間の学生の引継ぎ＞
・同行の際、スタッフが利用者によって変わるので、その際の学生の引き継ぎ。
＜職員による実習への意欲の違い＞
・職員ごとで「温度差」があり、「手間」と感じている職員もいる。受け入れ、育成の意味について、理解してもらう取り組みが必要と思います。
＜職員の学生に対する接し方の課題＞
・スタッフの経験や説明の得手・不得手によって、学生に対して厳しい言動になり、学生を萎縮させ、学習効果を下げてしまった。
・担当以外は積極的ではない。(学生がめんどう…という考え)
・指導が苦手なスタッフが多く、負担感がある。
＜学生の傾向に対する理解＞
・ベテラン看護師に今時の若い人の傾向を理解してもらうことに苦労した。
＜日程の調整＞
・包括給付や、各種会議(地域ケア会議)日程と重なった際。
＜看護師の記録の多さ＞
・記録物、同行した看護師に書いてほしいが、看護師も忙しく、コメントは実習指導者が書かざるを得ないので、記録物をもっと減らしてあげてほしい。
＜事業所の採算の低下＞
・採算は落ちる。学生の態度により、受け入れたことが、事業所にとってマイナスになる時がある。

実習の方法や内容に関する記述
＜実習の準備が不十分＞ ・準備や資料作りをちゃんとしないと、と思いながら不十分なこと。 ＜学生カンファレンスの時間の不十分＞ ・学生カンファレンスの時間を充分とれない時がある。 ＜実習スケジュールの調整の困難＞ ・1クール2週間実習の学校が増えてきているため、実習スケジュールを組むのが大変になってきている。(3校重なってきている時期もある) ＜説明する時間が長い＞ ・説明する時間が長く、実習時間をオーバーしてしまった。 ＜体験の難しい内容＞ ・デイサービスの見学等は、予定を組む事が可能だが、ケアプラン担当者会議やアセスメント、モニタリング訪問等、体験させられない事がある。 ＜学生の理解度の確認の難しさ＞ ・実習要項を提示していて、読んでくれずあいまいのまま、指導をしてしまう。そのため経験すべき項目を見学で終わらせることもある。学生の理解の程度を確認することが難しい。
学生・教育機関側に関する記述
＜学生の取り組み姿勢の問題＞ ・看護師の適性がどうかと思う学生もいるところで、やや困るが、学校にまかせている。 ・学生がどこまで何をするのか？学生によって目標が違うため、そこを共有するのが、大変な時がある。 ・学生のコミュニケーションが図ることが苦手な学生が、年々、増えていると感じる。考えると良い事でもあるが、不機嫌な顔が表情として、明確な子が多くなった。 ＜自転車に乗れない学生＞ ・看護学生ではなかったが他実習生において、自転車に乗れない学生がいた。事前に教えていただけるとありがたい。 ＜偏った教育をする教員との連携＞ ・個性が強く、かたよった教育をしてしまう教員との関わり。 ＜実習担当者側の実習目的の理解が不十分＞ ・実習要項を提示していて、読んでくれずあいまいのまま、指導をしてしまう。そのため経験すべき項目を見学で終わらせることもある。学生の理解の程度を確認することが難しい。

表 50　看護学生の実習に関する希望・要望のまとめ

実習の方法や内容に関する希望・要望
＜記録物への負担の軽減＞
・こちらにあまり、記録物への負担をかけないでほしい。
＜同じ利用者への複数回の訪問＞
・人生経験の少ない学生たちが、1日訪問し、思い量る事は難しいと思う。しかし、5日間の実習では、なおさらわからないまま終了してしまう。同じ利用者にもう1回行けると良いと思う。
＜学生による主体的な実習先の選択＞
・大変だと（学生も先生も）思うが、短い中で何を学べるかは大きいと思います。実習先を選ぶのも学生が主体になれるところがあると良いと思う。（病院だけでなく在宅中心とか）
＜学生を評価することへの不安＞
・学生の成績をつける必要性があるか。(指導者が)
・成績をつける学校とそうでない学校がある。
・専任で学生を毎日みていることが殆どなく、夜勤も行うため、成績をつけるための判断材料が少ない中で成績をつけるのが不安である。(学生の将来に係わるとなるとつけるのに不安である)
＜個人情報の契約＞
・個人情報の契約
＜見学すら難しいケースに対する実習元の理解＞
・地域包括支援センターでは、毎月500～600件の相談を受け、150件以上の訪問と各種会議への出席や会議開催がある。特定の利用者との関わりではなく、新規に対応する機会や、特に虐待等、対応策の検討を事前に行う必要がある等、実習生が見学すらできない状況があることを実習生、学校の先生に理解してほしい。
＜現行のプログラムで十分かどうかの確認＞
・当センターが担当している看護専門学校の学生は、しっかりした人が多く、実習での学びも、多く語ってくれる。(カンファレンス時 etc)日々、行政の要望等により、新たな事業を創出している包括の現場にあって、「包括の今」を伝えるプログラムでよいのか、確認したい。
＜利用者と向き合う時間の確保＞
・実習期間を長く取って、利用者とじっくり向き合える時間を作ってほしい。
＜少人数での指導＞
・少人数での実習だと指導を行いやすい。
＜実習時間の効率化＞
・実習時間(単位習得のための)を、もう少し短くして、複数の学生で得た学びを共有する時間を多くとるなどの工夫もあって良いのではないかと思います。現場の指導者の負担が大きいので。
＜実習の方法論の検討＞
・在宅の実習はどこの大学も困っている様で、ステーション立ちあげてから、すぐに相談があったが、実習の方法論を根本的にかえていかないと在宅での実習は難しいと思う。
・病院側と在宅側のつなぐ実習について、座学だけでなく、リアルに病棟実習や患者指導の現場を見せてほしい。
・在宅での医療処置等が増えてきている。病院で3年以上の勤務をして、経験を積んでほしい。訪問看護師としての業務は、それから人々が望ましいと考える。

学生・教育機関側に関する記述

＜学生の健康状態の管理＞

・健康状態の管理、途中気が付けば対応するが、本人も自ら訴えてこなかったり、様子が変わらなく見えた時、困った。

＜学生の取り組み姿勢の改善＞

・質問をした際、わからなくてもよいので、意思表示をしてもらいたい。

・大学３年・４年生が実習に来る。しかし実習で学びたいことが、ほぼ同じで自分の意見や考えが出てこない。色んな意見があって当然なので、伝える力をつけてほしい。今後在宅で生活する方々に看護師が必要とされる場面が増えてくる。医療面だけではなく、生活面をどう考えていくかという視点も持っていてほしい。

・基本的に実習生は、ジャマになると言う事を、教えておいて欲しい。来ることでのメリットは当然あるが、自分たちが、イレギュラーな存在であることを理解の上で、きてほしい。

・プライベートの空間にお邪魔をする意識をもって、実習にあたってほしい。

・もう少し、積極的に学ぶ姿勢と、病院と同様、訪問にも先生が同行してほしい。

・実習指導者によるものか確かではないが、その場で活発な質問を出して、なるべく身につけて学習に役立ててほしい。

・人の生活を見る職場なので、あまりかしこまらず、気楽な気持ちで、利用者や地域を見てほしい。

・毎回、みな同じことをまとめで発表する。(ほとんどケア内容ばかり)まだまだ、理・解が足りないと思う。在宅の制度やどんなケアをしているか等を学校で予習してほしい。最近はNHKでよく在宅ケアの特集をやったりするので、そういうのを見せたらどうか。ケアの技術よりも、その人らしく、生活ができているかという考察が大事。

・個々の学生にもよるが、それぞれの思っていることや、感じていることの表現が少ないように感じることがある。ただの同行訪問学習ではないと思っている。

・学びたい具体的なことがあれば何でも伝えて来てほしい。

・基本的な社会人としてのマナーがあると良い。

・年齢相応の常識を持ち、健康管理をしっかり行い実習へ臨んで下さい。

・最低限のマナー(利用者から個人情報聞かれても答えない、聞かない/助言等をしない/病状・障害等を自己判断して本人に対応しようとする等)は、学んできてほしい。

＜事前学習の充実＞

・出来れば事前学習で、制度の理解と施設の違い程度は学んでから来てほしい。

・事前学習は、学校側でしっかりとしてほしいです。オリエンテーションでは省きたくとも、学生が理解していないので、再度することになってしまっている。Ex.老健であるので、その役割、介護保険制度は、捉えておいてもらいたい。

・福祉施設への実習の目的をきちんと理解して臨んでほしい。

実習先の施設や機関についての事前学習。地域の特性についての事前学習。社会人としてのマナー。積極性。

＜実習内容の提示＞

・具体的にどんな実習や体験をしたいのか積極的に提示してほしい

＜実習元と実習先での連携＞

・介護の分野について、学生の教育時間に割く時間は多くはなく、ほぼ全ての学生が興味すらないで来られる事。又、期間も短い為、教えられる事もわずかである事から、受け入れ先と、送り出す側とでもっと、協議していく必要があると感じる。

＜実習元の教育機関での学習内容の共有＞

・どのような講義を、今現在行っているのか、資料があるとよいと感じる。学校と実習とで異なる意見であると、学生の混乱をまねくと思う。(過去と現在の教育のちがいなど)

＜実習元の教育機関の教員に対する教育＞

・学生を教育している教務の姿勢を見ると、その学生がどの様な学生か分かる。実習を受け入れるのは良いが、まずは、学校での教育をしっかりして欲しい。

実習を通した学びへの期待

＜高齢者施設・介護に対する理解の深化＞

・カリキュラムも多く、大変と思うが、高齢者施設、介護をとりまく状況について、もう少し理解を深めてくれていると良いと思う。(興味がある学生さんばかりではないので、難しいとは思うが)

・病院だけでなく、今後の超高齢化社会を見据え、福祉施設での看護師の必要性、重要性を考えてほしい。

＜地域生活の学び＞

・地域で生活をしている様子をみてほしい。

＜地域における看護の学び＞

・のびのび実習させてあげたいです。初めて、地域の現場に出られるので、色々新鮮だと思うのです。看護が地域でどのように展開されているか、ぜひ経験してほしい。

・医療現場ではない私達のような就労支援施設で、実習を行う場合は、「病気を持っている○○さん」という関係ではなく、「地域で生活している○○さん。因みに○○さんは○○という病気を患っている」と言ったようにまずは医療的な先入観を外して「一人の人」として関わる視点を持ってもらいたい。

・地域包括ケアの中では、多くの職種の人たちの連携が必要。医師→看護師→介護スタッフの流れだけでない「生活」の視点からトータルで利用者と語り合えるシステム作りの意義を理解してほしい。

・現在は実習先(受け入れている処)が少ないと思う。しかし地域での看護は社会的な要請はあるので、実習ができるよう、先輩スタッフについて、ぜひ経験して欲しい。地域での大事な仕事である事を理解して欲しい。

・地域包括支援センターの医療職、保健師、看護師の存在は不可欠と思われるが、実際の HP 勤務がある。又、訪問看護の経験などは、勤務する中で、求められる要素が下地があるため、地域住民の方への活動に実践力、全体をみれる力の基礎になっているので、欠かせないと思う。そのような人材・経験のできる人の教育・養成を期待している。

・予防や在宅療養が重要視される中で、地域包括ケアの視点は看護師にも必要になってきます。見学実習でもよいので看護学生に地域包括支援センターを見てもらい、地域と関わる機会を持ってほしい。

＜地域包括支援センターの業務に関する理解の深化＞

・看護職として、医療行為はないが、プランをたてる上での疾患との関連性・予測という点で資格が役立つので、しっかり学び、訪問看護など体験した後、包括の仕事をすると、視野の拡大、社会資源の知識が増える、人間関係の拡大などメリットがあるので、包括のことを学んでほしい。

＜病院と在宅の違いと共通点の学び＞

・毎年、学生を受け入れているせいか、大きな問題なく実習ができている。大学の先生も協力してくれている。学生には、病院と在宅の違いを知ってもらった上で、でも看護の目的は一緒だという所を学んでほしい。

実習制度全体に関する希望・要望

＜訪問看護認定看護師の活用＞

・訪問看護認定看護師をもっと地域包括ケアの中心や教育で活用してほしい。

＜実習指導者の養成＞

・実習を受け入れるのであれば本来きちんと指導者（養成を受けた）がいるべき。養成を簡易にできるようになると良いのではないかと思う。

＜実習指導者への報酬＞

・実習指導は楽しくやらせてもらっているが、業務との兼任が多く、残業になりやすい。なのに実習指導者はしっかり講習会に参加して、指導者になっているのに、それに対する報酬がない。スタッフは精神面でも辛く、少しでも身になるような物があればいいと思う。(給料に反映されるとか、専任で指導できる環境等)・学生の成績をつける必要性があるか。(指導者が)

＜実習日数短縮の課題＞

・地域包括の実習日数が、減ってしまったので、その日数では、あまり意味がないと思う。

第２節　　考察

１．調査対象の特徴

１）施設の特徴

調査対象は、東京都23区内の地域包括ケアシステムに携わっている1678か所の施設・事業所とした。回答があったのは、350か所（20.9%）であった。

23区に限定した理由は、様々なサービスが選択可能な都市型の機能を有する施設、事業所であり、地域包括ケアシステムにおいて多様なことに対応できる人材を育成することに適している実習場であると考えたためである。

回収率が低かった理由としては、調査内容が看護学生の実習に関することのため、実習を受け入れていない施設・事業者や、小規模で実習を受け入れる余裕がない施設・事業所等では、関心が薄く返送が少なくなった可能性が考えられる。

２）実習の受け入れ状況

看護大学、看護短大、養成所3年課程、養成所2年課程の実習受け入れ状況は、全て5日以内の実習が多く、6~10日、11~20日、21日以上と順に受け入れは少なくなっており、看護短大や養成所2年課程では21日以上受け入れているところはなかった。

３）回答者の特徴

回答者は年齢40～50代がもっとも多く、実習調整者、実習指導者、教育担当者がほとんどであった。実習の指導に関する研修等の受講歴は、受けたことがない人が65.4%で半数以上を占めており、半数は手探りや経験から実習指導にあたっていることがわかる。

２．実習の受け入れに対する要望

訪問看護ステーション等の実習指導者は、個別にケア提供をしている療養者宅への同行訪問で指導に当たっている。そのために業務をしながらの指導となる。病院施設で実施する指導形態とは異なるために、多くが指導担当者を兼任という形での指導を望んでいると考えられる。また、教育機関の教員が実習の場である療養者宅での直接指導は不可能であり、そのため常に学生に引率して指導することもできない現状がある。学生が訪問看護ステーション等事業所に戻った時に、事業所を訪れた教員からの指導となる。よって、望ましい教員の指導体制は、カンファレンスや必要時の指導を望む結果となったと考えられる。

また、教育機関との関わりも、講義に出向くことや、教員の研修も受け入れたいという、相互交流を求めていることが分かった。

３．実習施設・事業所が提供できる内容について

居宅支援内容としては、半数近くが「認知症高齢者のケア」「要介護高齢者のケア」「医療的ケア・重症者ケア」「終末期にある療養者のケア」「障害児・者、高齢者の生活維持の支援」を実習場として提供できると回答しており、医療依存度やケアの多い様々な実習の場が提供できる可能性があった。施設内支援としては、「要介護高齢者のケア」「認知症高齢者のケア」が 20%強で最も多く、その他がん患者の支援やリハビリなどの回答があったが、施設によってばらつきや特色があることがわかった。実習場所として選択する施設により実習内容が異なるが、様々な場での実習が可能であることが明らかになった。

４．実習受け入れ施設・事業所の現状

１）実習目的・目標の理解について

実習目的の理解は概ねできていると答えており、その点の困難は少ないようであった。実習のかかわり方は、指導に当たるスタッフが中心となっており、人員が少ない中で実習のために工夫している様子が分かった。実習目標の達成に関しても 8 割ができている、だいたいできていると答えていたが、2 割はどちらとも言えないと答えており、理由は兼任しながらの指導が多く達成しているかまで評価することができないことや、短期間でそこまで判断できないなど、関わる時間の短さによる困難を述べていた。

２）実習方法の改善の必要性について

約 46%が実習方法の改善の必要はない・それほど必要ないと回答しているが、実習内容に満足しているというより、実習が短く現場の現状を変えるのが困難、学生の興味が薄いからといった理由であり、なんとか工夫して実習をこなしていることが推測される。30%程度はどちらとも言えないと答えており、理由は時間の制約や学生のレディネスが不明、どうしてよいかわからないからと述べていた。約 20%は改善の必要あり・やや改善の必要ありと回答しており、実習時間が短く実習を深められない、学生と関わる時間が短い、もっと生活の場を理解して欲しいといった理由が述べられていた。全体的に実習の改善の必要性は感じているものの、時間や人的制限、学生の資質、どう改善すればよいかわからないというように、各施設が手探りのなか工夫しながら実習の場を提供していることが推測される。

３）実習指導者の準備について

実習指導者の準備については、困っていない、あまり困っていないと答えたのは、40%強であったが、どちらともいえないが 33.9%、困っている、まあ困っているが 20%近くを占めていた。困っている、まあ困っているの理由には、スタッフ数や利用者数の少なさで対応が不十分になることや、多忙でスケジュールが立てにくいこと、

引き受け学校数が増え負担が増えていると述べており、日々の業務と実習指導でかなり手一杯の様子がうかがえる。

4）実習を受け入れて良かったこと、困ったことに関して

実習の受け入れについて、良かった、まあ良かったが70%強占めており、どちらでもないが20%程度であった。実習を受けることにより業務が増え、忙しい時は困るものの、学生から刺激を受けたり、利用者によい影響を与えていると回答していた。また、後進の育成や包括医療を知ってもらうことで高齢者の在宅復帰が促進されることを期待する回答もみられた。

一方、実習の受け入れについて、困っていない、あまり困っていないが半数強であったが、その理由は短期間なのであまり気にならないといったことであった。困っている内容に関しては、業務増加の負担や利用者に負担がかかること、学生の資質について、カリキュラムや記録、教員に差があるといった回答がみられた。養成する学校もそれぞれ工夫して教育を行っており、教育の内容には差があることが考えられる。

第３章　インタビュー調査

第３章　インタビュー調査

第１節　調査内容

１．調査の目的

本調査は、地域包括ケアを担う看護者育成のための多様な看護学実習施設における臨地実習標準指導要領を作成するための基礎資料を得るため、実習受け入れにおける現状と課題について詳細に聞き取りを行うことにより、具体的かつ明確化することを目的とする。

２．調査方法・内容

1)　調査対象

アンケート調査票配布時に同封した、インタビュー調査への参加協力の意思を表明し、同意の得られた21名。

2)　半構造的面接

インタビューガイドに沿って半構造的に面接を行った。

3)　調査内容

実習を受けている施設・事業所の場合	実習を受けていない施設・事業者の場合
・実習を受け入れての困難（養成所の体制、実習受け入れ環境、実習内容、養成所の方針や姿勢への違和感等） ・困難に対しての解決策 ・実習を受けたことでのメリット ・実習を通じて学生に学び取ってほしいこと ・実習を受けるにあたって理解・協力してほしいこと ・実習を受ける立場から、実習場として提供したい内容や伝えた活動	・どんな実習だったら自分の役割や活動を理解してもらえか ・どの様な状況が整えば実習を受けられるか ・学生に学び取ってほしいこと
・実習指導者の教育に求めること ・教育側に担ってほしい役割	

6)　調査期間

2016年１月から２月

7) 分析方法

インタビュー調査内容を逐語録とし、精読する。質問項目ごとに意味内容の類似するものをまとめ、整理した。研究目的である実習受け入れの困難と対処、今後の課題の視点で本質的意味を見出した。

3．倫理的配慮

研究内容、研究への参加の自由などを含めた説明書を同封し、質問紙の返送をもって同意を得た。また、東京医科歯科大学医学部倫理審査委員会の承認（承認 No.2290）を得て実施した。

第２節　調査の結果

１．調査対象者の概要

表 52　調査対象の概要

施設・事業所の種類	所有資格	年代	職員数		実習受け入れ状況
			常勤	非常勤	
訪問看護ステーション（以下、訪看）	看護師、保健師 介護支援専門員	40 歳代	25	21	有
	看護師	40 歳代	8	5	有
	看護師、保健師、その他	50 歳代	3	0	無
	看護師	50 歳代	2	5	有
	看護師	40 歳代	4	3	無
	看護師	30 歳代	2	5	無
	看護師	40 歳代	2	1	有
	看護師	60 歳代	8	0	無
	看護師、専門看護師	40 歳代	11	1	有
地域包括支援センター（以下、包括）	看護師、保健師 介護支援専門員	50 歳代	6	2	有
	看護師、介護支援専門員	40 歳代	6	2	有
	介護支援専門員	40 歳代	11	0	有
	看護師、保健師	20 歳代	4	0	無
	看護師、保健師 助産師、介護支援専門員	30 歳代	6	2	有
	看護師、介護支援専門員	40 歳代	12	3	有
	看護師、介護支援専門員	40 歳代	6	0	有
病院	看護師	50 歳代	69	41	無
	看護師	40 歳代	1975	不明	有
就労移行支援センター	精神保健福祉士 認定心理士	40 歳代	4	3	有
診療所	看護師	40 歳代	11	6	有
介護老人保健施設	看護師、介護支援専門員	50 歳代	68	26	有

2．分析結果

1）　実習を受けている施設・事業所の場合

(1)実習を受け入れての困難

【短期間の実習では学びが浅くなる】

・訪問看護から発展している暮らしの保健室や看多機なども組み入れた方がいいと思うが、実習期間が短いとかえって学びが浅くなる。（訪看）

・2 回の訪問で看護過程の展開をしているのは難しさがあるが、やってもらっている。（訪看）

・短期間の実習では濃縮した話をしなければならない。（包括）

・行政から求められる多岐にわたる地域包括ケアの役割を短期間で伝えるのは厳しい。（包括）

・実習期間がもう少し長ければもっと深い内容を伝えられる。（包括）

・短期間の実習で出来ることには限界があるので、実習目標は今ぐらい（高くない程度）で違和感はない。（包括）

・短期間の間に看護として学ぶべき広範囲のケアを見せてあげることはできない。（包括）

・短期間の実習では、ざっくり見てもらっておしまいで、展開までは難しいのが現状だと思う。（包括）

・看護師の実習は日数が短いこともあるのかさらっと流してしまっている。（包括）

・短期間の実習で、1日の場合には包括の存在を知ってもらうこと、3日間の場合には看護職の役割を知ってもらうことで終わってしまう。（包括）

【養成所が実習施設・事業所に求めていることが分からない】

・大学から指導方針を提示されるが、指導内容はこちら任せになっているように感じる。どのような立ち位置で実習施設が関わったらよいのかわからない。（包括、病院）

・学校がどのようなことを望んでいるのかわからない。（包括、就労支援）

・実習の急な申し入れがあること。（就労支援）

・現場と学校のずれを感じるが、当たり前のものとして受け止めている。（包括）

・教員の都合で実習の振り返りの時間を急に変更されると予定通りに実習プログラムが進まなくて困る。（包括）

【提供できる実習内容にばらつきがある】

・実習期間が短いが、学校側の求める目標が高く、学生が大変だと感じる。「いいケース」が必ずあるわけではない。（訪看）

・保健師の視点での仕事が中心なので看護師となる学生へ伝える内容はこれで良いのか考える。（包括）

・多職種連携の実際や退院前カンファレンスの実習を希望されることが多いがいつも提供できるものではないので、実習によって差が出てしまう。（包括）

【学生の学力やモチベーションが異なることで指導に戸惑う】

・学生の基礎学力のレベルが異なる。（訪看、就労支援）

・教科書どおりの学びになっている。（訪看）

・ 学生が何も質問してこない。（訪看）

・大学と専門学校のレベルの違い。大学生は実習を楽しんでくれるが、専門学生はついていくのに精一杯で、実習をしんどいと捉えている。講義に行っても、大学生はしっかり聴講しているのに対して、専門学生は寝ている学生が多い。（包括）

・学生のマナーが悪く、地域のコミュニティーに入ってもらう際に、トラブルを起こすことがある。（包括）

・学生の記録の個人差が激しい。（包括）

・学生の知識の程度がわからない。（就労支援）

・とくに学生の年齢が高いと、その経験から私の方が知っているという姿勢になるためやりづらい。（就労支援）

・やる気のない学生がいること。忙しい中、時間を割いているので、指導が無意味に感じる。（訪看）

・在宅に興味のない学生にあからさまに実習しなければならないから来ているといった態度をとられると辛い。（包括）

・希望通りの実習ができないことの不満を露骨に態度に出す学生がいる。（包括）

・やる気のある学生とそうでない学生では学びに差ができてしまう。（包括）

【実習指導を担当するスタッフに負担を強いるため人員の確保に難渋する】

・自分１人で実習を受けているので、自分がいなくなると、実習が引き受けられなくなる。（包括）

・実習を受けることができるのが１人しかいないこと。１人で実習の指導と業務（就労移行の同行など）を遂行しなければいけない。（就労支援）

・担当するスタッフは通常の業務と並行して実習を受けるので、スケジュールを調整しなければならず身体的にも精神的にも負担である。（包括）

【実習を受け入れる環境が整っていない】

・学生用のロッカー、食事をする場所、記録をする場所がない。（老健）

・営利目的で設立している組織だと、実習も営利目的となり学生の学びにならない。（就労支援）

【地域包括ケアに求められる実習のあり方が不確立】

・包括に求められる役割が大きく変化している。（包括）

・保健所の実習は４年生大学が中心のため、専門学校の学生が地域で暮らす高齢者の支援が分からないということにならないように、地域包括で現場の話をしてほしいと依頼を受ける。（包括）

・個人情報保護の観点から対象の選定と同行訪問は難しい現状がある。（包括）

【実習生にじっくり関わる時間を確保できない】

・基本的なコメント指導はできるが、利用者のことになると受け持ち看護師に聞いたりして対応しており、記録を通してだとタイムリーに伝わらない。（訪看）

・実際に実習しているときの様子はわかるが実習全体は学生に聞くまでわからないので手探りな部分がある。（包括）

・厚生労働省などが、学生を育てる必要性を示してくれると受けやすくなる。（就労支援）

【指導者の指導力に不安がある】

・学生を泣かせるような指導をするステーションがある(将来訪看に来てくれなくなるからやめてほしい)(訪看)。

・自分で望んで管理者や指導者になったわけではないので、実習を受け入れるには戸惑いがある。（訪看）

・教育者ではないので自分たちが指導していることが正しいのかどうかわからない。（包括）

・地域包括ケアに関する実習を自分自身が受けた経験がないので、指導者モデルがない。（包括）

・看護職一人で誰にも教えてもらえることもなく実習指導をしている。（包括）

【養成所の実習への準備不足を感じる】

・事務手続き上のルールが多く理解できない。（訪看）

・教員が実習上の手続きについて把握していない。（包括）

・短期間の実習なので、ここだけは押さえてほしいということが不明確。（包括）

【教員の知識と指導力不足を感じる】

・学校の教育は凝り固まっており、それを学生に押し付けるため遊びが無い(訪看)。

・実習担当に初めて来る教員に学生のトラブルを伝えられないこと。（教員と学生の関係性が希薄なため）（包括）

・教員が学生に対して上から物を言うこと。学生にしっかりした教育をしている学校がないと感じる。（訪看）

・教員の質が低い。（訪看）

・養学所側の地域包括への理解が不十分。（包括）

・地域包括ケアを学ぶことについて、教員が包括に何を望むがわかっていないのではないかと思う。（包括）

・変化する地域包括ケアシステムについて現場にいない教員は追いついていけないのだと思う。（包括）

(2)困難に対しての解決策

【教員との打ち合わせをし、意思疎通を図る】

・実習要項を見て、事前に学生が実習しやすいように調整している。（訪看）

・気になる学生について、事前に配慮できるように教員と打ち合わせをする。（訪看）

・実習中の学生の対応で気付いた点は、できるだけその場で気付いた人がフィードバックするようにしている。それでも気になるような学生は教員に伝える。（訪看）

・多忙な時期に実習が重ならないよう日程調整している。（包括）

・実習側の情報提供により充実した内容の実習要項になってきている。（包括）

・急な予定変更は困ることを伝えて事前に調整してもらっている。（包括）

・学生にセンターの独自性を肌で学びとってもらえるような実習になるよう教員とも相談して計画を立てている。（包括）

【スタッフとよい実習となるよう検討や役割分担をしている】

・あらかじめ緊急時の学生への対応について決めておく。（就労支援）

・次年度の実習での役割分担を早めに決めている。（訪看）

・一人の利用者に負担がかからないように、学生の実習を楽しみにしている人にはいくように利用者の状況に合わせた一覧表を作って対応している。（訪看）

・利用者への配慮とよい実習ができるようにという思いで、方法を毎年検討している。（訪看）

・いろんな看護師、いろんな場面、いろんな利用者さんに行ってもらえるようバラエティに富んだスケジューリングをする。（訪看）

・指導が気になるスタッフには注意する。（訪看）

・管理者や指導担当者が気になっている学生には時間を調整して関わるようにしているが、学生を待たせたり、訪問が押したりしていることもあるので、他のスタッフにも対応してもらうようにしている。（訪看）

【問題が生じた場合には必要に応じて学生を注意する】

・服装が適していないこと等は訪問に行かせられないこともあり、その場で注意する対応をとっている。（訪看）

【実習はできるだけ平等に受けるようにしている】

・実習時間が少ない依頼があるので、できるだけ平等に受けようと思っている。（訪看）

【充実した実習ができるようプログラムを立てている】

・多岐に渡る内容を伝えるプログラムとするために吟味を重ねている。(包括)

・実習の充実のために関係機関と調整したうえでプログラムを組んでいる。（包括）

・実習が始まった当初は実習を受ける側の判断で実習プログラムを立てていた。（包括）

・実習要項には基本的な事項のみ明記されているので、それをふまえた形で実際には包括で大事に思っていることを現状にそって説明している。（包括）